

# 日本政府出展事業（日本館）基本計画（案）

## I. はじめに

本基本計画は、2025年大阪・関西万博政府出展事業（以下、「日本館」という）の基本構想<sup>1</sup>（2021年4月策定）をもとに、日本館の各要素をより具体化し、今後の実施方針を示すものである。

## II. 大阪・関西万博 開催の意義

国際博覧会は、人類の科学的・文化的な成果や未来像を提示する国際的な祭典である<sup>2</sup>。

日本は、1867年パリ万国博覧会から多くの国際博覧会に参加し、1970年に初めて日本で開催された日本万国博覧会（大阪万博）以降、万博のホストを契機として、インフラ整備や都市開発などを通じて日本自身が大きな飛躍を遂げるとともに、科学的・文化的な成果や新たな未来像を提示するなど、国際社会に大きく貢献してきた。

そして21世紀の万博は、2005年愛知万博を機に、人類の活動の変化と地球環境への影響をはじめとした人類共通の課題に対する理解を助け、その解決に向けた道筋のあり方を発信してきた。

現在、一つの国だけでは解決できない地球規模の様々な課題が人類の前に立ち現れており、持続可能な社会の構築と豊かな社会生活との両立をいかに達成すべきかが求められている。

大阪・関西万博は、持続可能な開発目標（SDGs）達成の目標年である2030年を5年後に控え、SDGsの達成を検証し、さらにはその先の世界（SDGs+beyond）に貢献する国際博覧会とする。

大阪・関西万博は、世界が危機に直面した新型コロナウイルス感染症を経て企画される初めての万博となり、そのテーマは「いのち輝く未来社会のデザイン（Designing Future Society for Our Lives）」である。

このテーマは、世界が様々な課題に直面する中で、参加者一人一人に対し、「いのちが輝くとはどういうことか」を問いかける。さらに、地球規模の課題への対応を豊かさの中に織り込みながら、いのち輝く未来社会を実現していくために、何をすべきかを問いかける。

---

<sup>1</sup> 日本館の方向性について検討するため、2020年7月からワークショップを開催し、計9名のクリエイターを中心に基本構想案を検討。2021年4月、日本館の出展目的・建築空間・設計・展示のあり方、日本館テーマ、推進体制（総合プロデューサーの設置）等を盛り込んだ基本構想を策定した。

<参考><https://www.meti.go.jp/press/2021/04/20210413006/20210413006.html>

<sup>2</sup> BIE(博覧会国際事務局)による定義：国際博覧会条約第一条(定義)

1. 博覧会とは、名称のいかんを問わず、公衆の教育を主たる目的とする催しであって、文明の必要とするものに応ずるために人類が利用することのできる手段又は人類の活動の一若しくは二以上の部門において達成された進歩若しくはそれらの部門における将来の展望を示すものをいう。

2. 3. (略)

大阪・関西万博では、それらの問いに対する世界の叡智とベストプラクティスを結集する。

また、AI や IoT、ロボット、ビッグデータをはじめとするデジタル技術を活用して社会的課題の解決と経済発展を両立させる「Society5.0」の実現に向けた取り組みを実装・実証し、国内外の多様な主体によるイノベーションを促進する「People's Living Lab（未来社会の実験場）」とする。

さらに、多様な価値観を尊重しながら、「いのち輝く未来社会」を築いていくための共創（co-creation）を推進する。

来場者・出展者をはじめ、大阪・関西万博に関わる一人一人が、未来社会の作り手である。

大阪・関西万博は、参加者一人一人が未来社会に向けた気づきを得るきっかけをつくり、そのような気づきを参加者が自らの社会生活に活かしていくことで、いのち輝く未来社会への営みを加速する「場」となっていくことをめざす。

### III. 日本館の検討の視点

#### （1）大阪・関西万博テーマの具現化

日本館は大阪・関西万博の顔であり、大阪・関西万博の掲げるテーマである「いのち輝く未来社会のデザイン」を、ホスト国政府としてプレゼンテーションする拠点となる。

そのためには、日本古来の自然観・死生観をふまえつつ、世界中の一人一人のいのちや、地球の中で生きている様々ないのちそのもののあり方に向き合っていくことが必要である。その上で、持続可能であり、かつ個々のいのちが尊重される豊かな未来社会への展望を示唆する館としていく。

このプレゼンテーションは会期中のみならず会期前・会期後も含めて実践され、来場者や日本館に関わった人々に対して未来の作り手としての気づきを得る機会を提供する。

#### （2）日本の取り組みの発信

日本として世界に対する貢献のあり方を示す観点からは、「いのち輝く未来社会のデザイン」という万博全体のテーマに関する日本独自の取り組みの発信や、SDGs の達成や SDGs の先（+beyond）の議論への貢献、Society5.0 の実装といった視点をもつことが必要である。2020 年 10 月に日本が「2050 年カーボンニュートラル」を宣言したことに伴う各種施策等<sup>3</sup>の方向性<sup>4</sup>を踏まえ、今後世界に貢献しうる日本の先端技術等の展示・体験を組み入れる。

<sup>3</sup> 例えば、2050 年カーボンニュートラルに伴うグリーン成長戦略（令和 3 年 6 月経済産業省）。

<sup>4</sup> パリ協定に基づく成長戦略としての長期戦略（令和 3 年 10 月閣議決定）

### (3) 次世代・多様性ある主体による参画機会の確保

これまでの国際博覧会において、新たな才能を育成するための挑戦の機会が確保されてきたことをふまえ、日本館のクリエイションにおいても、若い世代のクリエイター等の参加を積極的に推進する。また、子どもたちの社会教育の場として、子どもたちの参加・体験を重視する。

さらに、日本館のコンセプトに共感した者が自ら日本館の発信を行うなど、多様な主体を巻き込むとともに、ダイバーシティに配慮した運営を推進する。

### (4) 国際的相互理解の促進

日本館は、各国の首脳やVIPをもてなすホスト国政府館としての外交上の役割を持つことから、先進国・途上国を含めた参加各国や国際機関との相互理解促進の観点も考慮する。

多様な来場者の共感を得る観点から、どのような文化的背景や知識をもつ来場者にとっても親しみやすく、理解しやすい展示体験を追求する。

## IV. 展示体験について

### 1. 日本館のテーマについて

<日本館のテーマ>

「いのちと、いのちの、あいだに - Between Lives -」

<テーマコンセプト>

来場者は、他者と自分、人と人以外、生物と非生物など、様々ないのちといのちの「あいだ」(境界・差異・関係性)を見つめることで、それぞれのいのちの尊さや、互いに支えあっている存在であることを自覚する。

自分たちが大きな地球の中で生きていることに気づき、他のいのちと共創しながら大きな循環を生み出す大切さを学ぶ。こうした一連の体験を経て、SDGsに代表される社会課題を自分たちのこととして咀嚼し、未来社会のつくり手としての行動変容を促す。

## 2. テーマをふまえた日本館のあり方（コンセプト）

### （1）日本館が目指す来場者体験

現代社会では、産業の発展とともに、人間が多量の資源を利用し、自然が処理できる（自然の循環に戻せる）量を超えて、二酸化炭素や廃棄物等を生み出してきた結果、循環が乱れ、気候変動、土壌・水質・大気汚染、森林破壊など様々な地球環境問題が起こっている。世界全体において、これらの問題は生物多様性の確保や人間社会の持続にとって大きな脅威となっており、「炭素中立型の経済社会」や「循環型社会」への移行を目指しながら、新しい社会を築いていく必要がある。

昨今、持続可能性の問題に対する関心は高まりつつある一方で、生活者一人一人の日常において、地球に共に生きる他のいのちへ目を向け、環境の改善に対して具体的な思考をめぐらす機会は多いとはいえない。持続可能性の問題は決して自分に関係のないことではなく、地球という一つのいのちの束（船）のなかで巡り巡って私たちやその子孫の未来に直結する問題であり、未来社会の作り手たる私たち一人一人が、問題を自分たちのこととして認識し、その解決に向けて具体的なアクションを起こしていく必要がある。

日本館は、「いのち輝く未来社会のデザイン」という万博全体のテーマを前提として、人間だけが特別ないのちではなく、人間とそれ以外の生命や、無機物まで含め「いのち」と捉える考え方をもとに、「いのちと、いのちの、あいだに」をテーマとして定めた。

「あいだ」という言葉には、「境界・差異・関係性」といった意味が込められている。私たちの生活は「境界」によって隔てられた「差異」ある自分以外のいのちと、多様な「関係性」を築くことで成り立っている。「いのちと、いのちの、あいだ」を通じて、膨大な自分以外のいのちに支えられることで、私たちは生きていくことが可能となっている。

そして、いのちは、地球という限られた空間の中で、形を変えながら巡っている。地球に生きるすべてのいのちは、地球という単位の中で循環する一つの要素である。

日本館では、いのちそのものに立ち返り、現代社会の中で見えにくくなっている「いのちと、いのちの、あいだ」を見つめることで、他のいのちとのつながりや循環の中で生かされている自分たちの「いのち」を思い、自らが地球といういのちの束の一部（地球という船の一員）であるということへの気づきの機会を提供する。

そして、他のいのちと自分のいのちがつながっているということに気づくことで、地球で起こっている持続可能性の問題を自分たちのこととして認識するとともに、「炭素中立型の

経済社会」や「循環型社会」といった未来社会の実現に向けて一人一人のアクションが必要であることへの共感を促していく。

ひとつのいのちとして生きる私たちの生活は、豊かさへの追求とは切り離すことが出来ない。日本は古来、自然の循環に寄り添い、いのちを次のいのちに発展的につなげながら文化を育んできた。持続可能な社会とウェルビーイングな社会の双方を実現していくには「いのちと、いのちの、あいだ」を発展的につないでいくことに手がかりがあることを示していく。

その結果、世代や国籍を問わず、全ての来場者に未来社会へのアクションを促す。さらに、日本館の体験を経た人々、とりわけ子どもや若者をはじめとする「万博チルドレン」が、いのち輝く未来社会のデザインをリードしていくきっかけとなること目指す。

## (2) 展示体験の柱

### ① 循環の体験

日本館では、私たちが未来において目指すべき「炭素中立型の経済社会」や「循環型社会」の一部を象徴的に切り出し、来場者体験として提供する。

具体的には、いのちといのちを発展的につなげ、一つの循環を創出する。二酸化炭素・廃棄物の排出削減の取り組み<sup>5</sup>を行った上で、それでも残ってしまったものを、人の手で循環に戻していく技術・仕組みを実装し、その結果生み出されたものを来場者自身が加工する・食する等の体験を経た上で、廃棄物を再び循環に戻していく。これに向けて、カーボンリサイクル技術を活用したプロダクトの実装、万博会場から出される生ゴミを利用したバイオガス発電の実装、バイオガス発電を利用した藻類の栽培、日本館から生み出された素材（藻類等）を加工し来場者自身が楽しめる機会の提供等を検討する。

これらの体験を通じて、二酸化炭素や廃棄物に対して様々な役割があるという認識の変化のきっかけを提供するとともに、地球上のすべてが大きな循環の要素であることに対する気づきの機会を提供し、発展的に循環をつないでいくことで、持続可能で豊かな未来社会を構築していく可能性を訴える。

<sup>5</sup> 万博会場全体として、二酸化炭素や廃棄物の排出削減施策を実施予定。

「未来社会における環境エネルギー検討委員会中間取りまとめ<EXPO2025 グリーンビジョン>」

<https://www.expo2025.or.jp/wp/wp-content/uploads/expo2025greenvision.pdf>

## ② 循環と共にある社会の実現に向けて

持続可能で豊かな未来社会を目指すためのアクションを来場者に促すため、そのきっかけとなる展示体験を来場者に提供する。

日本は古来、循環の中で、いのちを次のいのちに発展的につなげながら、豊かな文化を育んできた。日本文化や技術、日本的な発想を手がかりに、循環と共にある社会の実現に向けた3つの要素に着目した展示体験を提供する。

日本館の展示体験を経て、持続可能で豊かな未来に向けた気づきを得た来場者が、それぞれに具体的な行動を起こしていくことを目指す。

### ○ 循環を見据えたものづくり

人は自然を加工し、様々な道具を作ることによって生活を向上させてきた。一方で、作ってから捨てるまでの過程において大量の資源を使いながら自然が処理することのできない量の二酸化炭素を排出し、廃棄物を生み出してきた。私たちの生産・消費活動においては、もののいのちをいかにつないでいくかという観点が求められている。

日本には、着物の生地を最後まで使い切る工夫など、美しさや機能性を実現しながら、ものを長く使い別の用途に再生するための考え方や技術が息づいてきてきた。このような日本文化のあり方を示しつつ、ものを大切に使い安易に捨てない、使い終わったら次のものにつないでいくことの重要性を訴える。同時に、製品がどのように作られたか、捨てた後どのように処理されるかに関心を持つことが持続可能な社会に向けて重要であることへの気づきを促し、来場者の行動変容へとつなげる。

### ○ はかなく小さな生き物

古来、人類は、地球に住むはかなく小さな生き物の一つとして、衣食住をはじめとした様々な社会活動において、他の生き物のもつ特徴を活用しながら生活を営んできた。しかしながら、産業革命以降、人類は地下資源を大量に採掘・消費しながら急激に活動の範囲を拡大させ、地球環境に大きな影響を与える存在となった。そのような人類の営みについて、持続可能性の観点から見直し、他の生き物と共存・共栄していくための現代的なあり方が求められている。

ある一定の条件の下で自然界に豊富に存在する微生物などの働きによって分解する生分解性プラスチックのように、自然の循環に寄り添いながら豊かな未来社会を築いていくためには、微生物の活用が一つのヒントとなる。

日本人は古来、日本酒・納豆・漬け物をはじめ、生活の様々な部分で微生物の特徴を活用し、微生物と共栄してきたが、近年、微生物の多様な性質の研究とさらなる応用が進められている。例えば、バイオ燃料・バイオガス発電などのエネルギー・環境分野や、生物資源由来の機能性素材や代替たんぱく質といった社会課題を解決する新しい市場、さらにはバイオ医薬品や腸内細菌の活用といった健康・医療分野等においてその働きが注目されている。

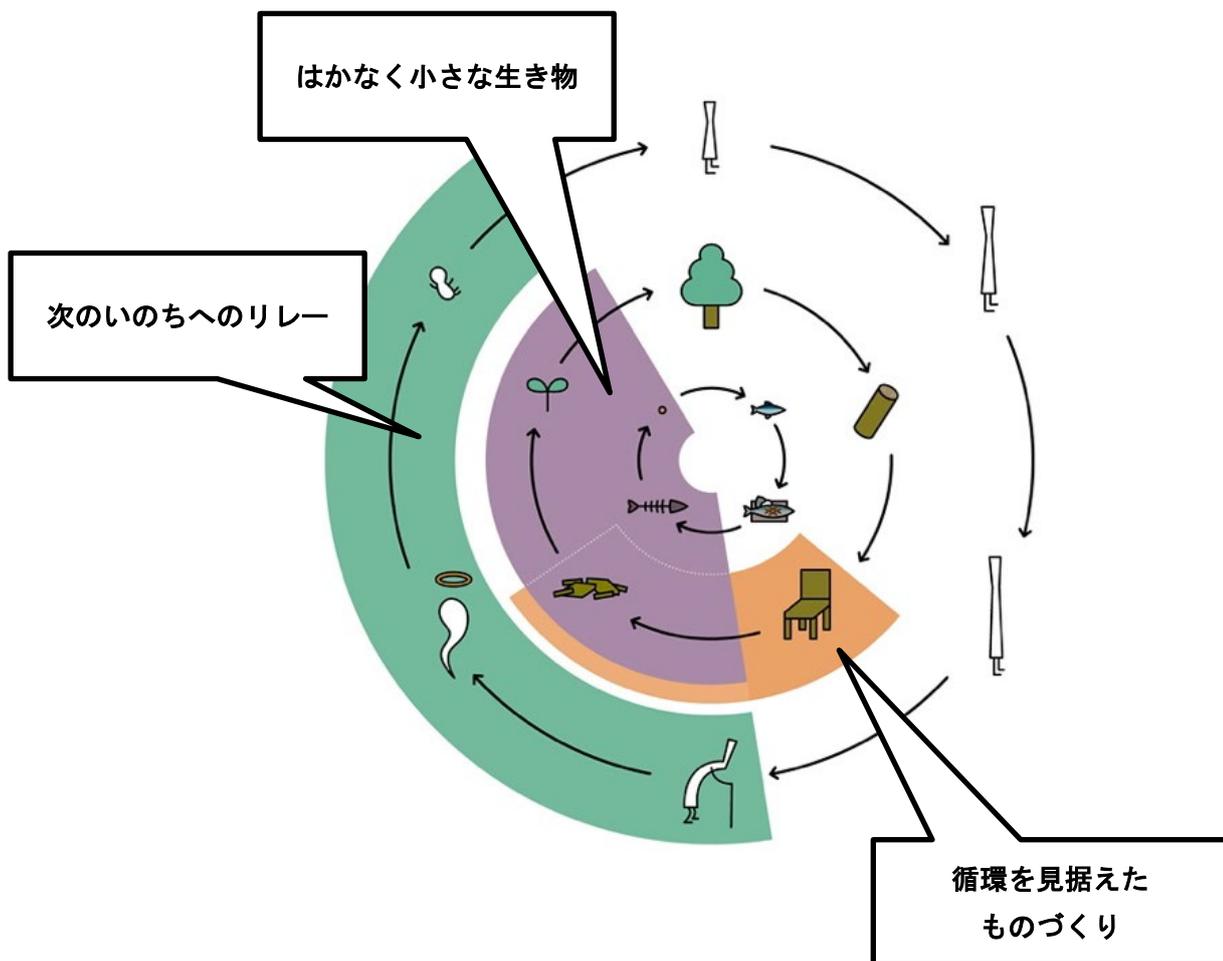
多様性に富む微生物の活用の可能性を示しつつ、はかなく小さな生き物としての人間が、人間自身も含めた様々な生物と、多様性を尊重しながら共存・共栄していくことの重要性を示唆する。

○ 次のいのちへのリレー

未来社会を構築していくためには、見えないものを含めてリレーをしながら次のいのちを育てていく必要がある。廃棄物が多様な用途を持つ藻類へと変わっていく、いのちのリレーを象徴するゾーンにおいて、日本文化における技と精神の発展や継承のありかたを振り返りつつ、未来の作り手たる一人一人が、持続可能で豊かな未来を構築するため、技術や知恵、社会をいかに発展させ、いかに次世代に伝えていくべきかを問いかける。

<図> いのちの循環を支える要素

生誕・成長・成熟・老化・死亡といういのちのサイクルの中で、上述の3つは次のいのちへ接続していくために重要な要素。





## V. 建築について

### 1. 展示と建築の融合

IV（2）①に記載の実装する設備等を前提とした建築とし、展示だけではなく建築と一体となった表現とすることで、一貫した来場者体験を創出する。

### 2. 建築における循環への配慮

SDGs およびカーボンニュートラルの達成や資源循環の実現の観点から、日本館では3R（リデュース・リユース・リサイクル）+Renewable（リニューアブル）を積極的に推進する。

また、博覧会協会の建築ガイドライン・調達コード等に準拠するなど、環境負荷低減やユニバーサルデザインの実現を目指す。建築材料には直交集成板（Cross Laminated Timber ; CLT）等を活用し万博終了後はこれを再利用につなげていく。

#### <図>日本館の立地



## VI. 来場前後の体験の進め方について

### 1. コアとなるコンテンツの設計：2022年度～

数多ある情報・コンテンツに埋没しないよう、日本館のコンセプトの発信に求心力をもたせることを目指し、IVに示した展示体験の具体化を進めるとともに、キーメッセージやキービジュアル等の開発を進める。キービジュアルの開発については、下記の点に留意する。

- ✓ 館内サイネージや各種コミュニケーション媒体における柔軟な運用が可能なビジュアル・システムを採用する。
- ✓ 生物のように変化し続ける循環型グラフィック形態をもち、縮尺や外形の変化、面的なパターン展開などに対応できる汎用性を持つビジュアル・システムを検討する。
- ✓ 日本館という名称を広報物等に用いる際のビジュアルは、上記ビジュアル・システムと整合的な形とする。

### 2. コミュニケーション施策の実施：2023年度～

日本館のコミュニケーションにおいては、2025年の大阪・関西万博の開催を待たず、会期前から日本館のコンセプトの浸透を図る。これにより質的に有意義な関係人口の増加を図る。同時に、日本館コンセプトを自分たちのこととしてとらえるきっかけを作る。

2025年の開催に向けて、日本館の展示体験に関するコンセプトを先んじて世の中に提示しながら、その具現化の過程に多様なプレーヤー/コミュニティを巻き込んでいく企画を実施する。

(例)

- ✓ 日本館に対する理解・共感の端緒とするため、日本館のコンセプトとともに、そこに至るプロセスをコンテンツとして広く公開する。
- ✓ 日本館の展示コンテンツの一部を市民参加型で製作する企画を実施する。
- ✓ 日本館や大阪・関西万博がどうあるべきかを考える市民参加型ワークショップを全国各地で実施する。
- ✓ 日本館のコンセプトと親和的な取り組みを行う企業・団体の取り組みとのコラボレーションを通じた施策を実施。
- ✓ 上記の実施に当たってはデジタル空間を有効活用する。

等

### 3. 日本館における体験： 会期中

IVに示した展示体験に加え、来場者（デジタル空間へのアクセスを含む）へのコンセプトの理解促進・メッセージ発信を目的に、開催期間全体を通じて様々な催事・デジタルコンテンツを展開し、幅広い層の関心を喚起する。

リアル日本館と連動したデジタルにおける体験を通じて、リアル日本館へ来場できない人を含む多くの人に向けた空間や時間の制約を超えたパビリオン体験の提供を図る。リアル日本館を単純に3DVR化するのではなく、デジタルならではの手法あるいはリアルとデジタルの相互補完により、日本館のコンセプトを体現するような施策および表現を検討する。

(例)

- ✓ コンセプトに関連の深い人間以外のいのちへの憑依体験
- ✓ 「炭素中立型の経済社会」、「循環型社会」に取り組む関係機関・団体、自治体、NPO、市民グループ等の食や文化、科学技術などの多様な情報発信イベント
- ✓ 事前のコミュニケーション施策と連動した参加型、創発型イベント

等

### 4. レガシー： 会期後

日本館にかかわる体験で得た気づきを自分自身の言葉で言語化する機会を設けることを検討する。また、日本館を経験した人が自分自身の経験を世の中に発信する際の素材として活用できるよう、コンテンツの一部をレガシーとして残せるよう検討する。

## VII. パビリオン運営

### (1) バリアフリー運営

多様な身体的特性を持つ来館者・アテンダントにとって適切な環境を、先端テクノロジーの導入も視野に入れながら、ソフト・ハード両面にて整え、きめ細やかな運営を目指す。

### (2) 多言語対応

開催国の政府館は、世界中からの来場者が来館するパビリオンであることから、展示メッセージや日本の技術、文化を正確に伝えられるよう、デジタルデバイスの活用、多言語能力の高いスタッフの配置等によって、運営接遇において多様な言語的ニーズに対応する。

### (3) 環境配慮への対応

リーフレット等紙資源の削減、会場運営におけるプラスチックごみの削減等、計画フェーズから二酸化炭素排出、環境負荷の削減に配慮した運営を実施する。

#### (4) 安全性への配慮

感染症対策、暑熱対策等、来館者の安全を最優先とした万全な運営計画を検討し、準備する。また、台風など悪天候時の緊急対応も十分に予測した計画を検討する。

#### (5) 混雑対策

テクノロジーを活用した入館者数の調整等の施策を実施することで、待ち時間削減による体験者満足の上昇と、混雑密集回避による安全性の確保を実現する。

### VIII. 体制

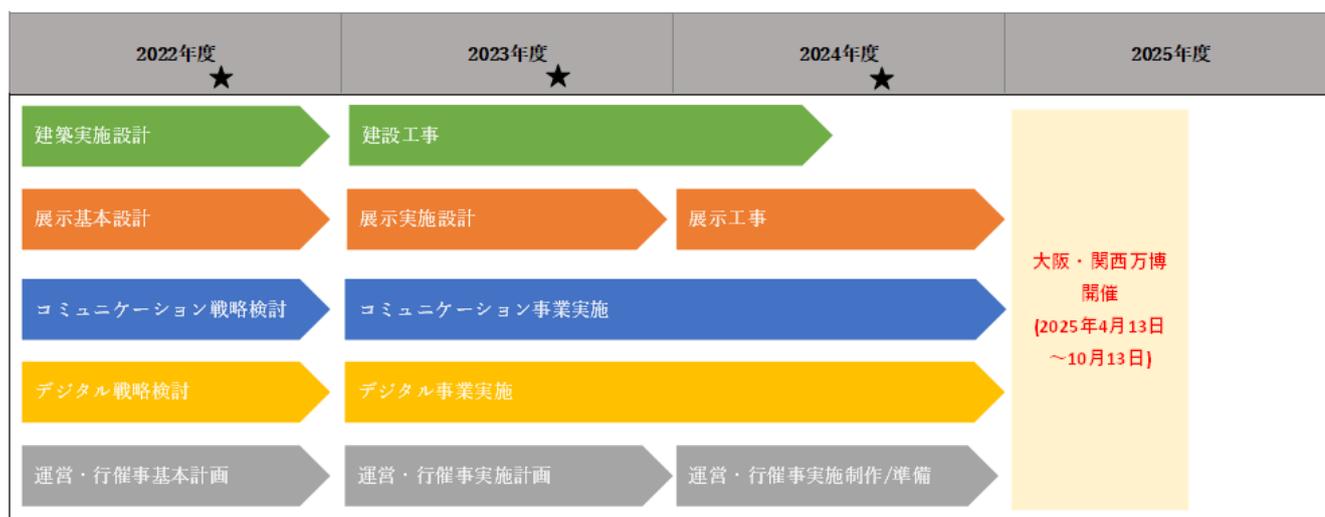
日本館を構成する展示体験・建築・コミュニケーション等の各要素を横断的に監修し、各分野に対し指示・提案等を行う総合プロデューサーを配置する。総合プロデューサーは、日本館全体の総合的なデザインを実施する総合デザイナーを兼ねる。

総合プロデューサーの構想の実現を図るためのサポート体制として専門家を配置し、経済産業省と共に日本館のコンセプトの実現を統括する。

また、2022年度、2023年度、2024年度においては、日本館の進捗状況について有識者から意見を集める有識者会議を実施する。

### IX. スケジュール

本基本計画策定後、大阪・関西万博開幕までの主なスケジュールは以下のとおりである。  
(令和4年3月時点)



★：有識者会議